

民俗学は死をどのように 対象としてきたか

墓制分布図史の展開

How Has Folklore Dealt with Death as the Research Subject?
Historical Development of Grave Distribution Map

岩野邦康

はじめに

- ① 民俗学確立期以前の分類と分布図
- ② 民俗学確立期の分類と分布図
- ③ 民俗学研究所期の分類と分布図
- ④ 民俗学研究所期以降の分類と分布図

結語

【論文要旨】

たとえば東京近郊地域の墓制分布に関する研究は、両墓／単墓という指標よりも、屋敷墓／共同墓地といった新しい指標を用いた方が発展性があるのではないだろうか。こういった新しい視角を導入をするには、両墓／単墓という枠組に基づいた研究の展開を、民俗学史全体の動きの中で整理し、検討する必要がある。本稿では墓制に関する分類案とそれを用いた分布図の作成に注目し、墓制分布図史の展開を検討する。

学史を概観すれば、民俗を対象とする研究が、調査研究に関する枠組の共有をもっとも強く意識していた時期は、1930年代の民俗学確立期である。民俗を分類するための枠組は、分類民俗語彙、三部分類案、質問文、採集要項などというかたちで公開され共有され、墓制研究の場合、とくに両墓制という墓制に重点がおかれた。

民俗学研究所が閉鎖される1950年代末まで、両墓／単墓という枠組に拠った研究は順調に進展しており、とくに分布図を作成する動きが他分野に比べて活発であった。しかし1970年代に入ると、両墓制を軸にすえた墓制研究は停滞期に入り、両墓制が濃密に分布する地域では精緻な研究が行われる一方で、希薄な地域における研究は混迷期に入った。

ひろく民俗研究全体をみると、ある重点的な研究テーマについて、大規模な調査研究基盤に拠り共通の枠組を用いて取り組むことと、研究者が個別にテーマを設定し自由に研究を行うことは、とくに資料の蓄積～交換という資料管理の面で二律背反の関係をもつ側面がある。学史をひもとくと、民俗学における資料管理は、資料の規模が整序の枠組の限界を超えた段階で破綻する傾向がある。これからの民俗資料論はこういった傾向を克服し、調査研究枠組の共有と個別研究の多様性とを並立させる方向性を模索しなければならない。

キーワード：民俗学史、墓制研究、民俗分布図、民俗資料論、分類民俗語彙

はじめに——課題と方法

本稿にまとめた論考の発端は、筆者が東京、埼玉の二つの地域において墓制に関する調査を行う機会があり、⁽¹⁾いわゆる屋敷墓と共同墓地の分布について興味をもったところにある。民俗学における墓制研究では、東京・埼玉近辺は両墓制の希薄な地域として位置づけられているのみで、墓制の分布という点では、空白の多い両墓制分布図が幾度か作成されているに過ぎず、両墓／単墓以外の分類枠組を用いた分布調査を行おうとする機運はあまりない。こういった傾向は、両墓制の確認できない地域の調査報告書によく見かける、「両墓制はない」といった記述に象徴されていよう。

民俗研究者が自らの調査研究テーマを自由に設定できることは当然であるが、一方で両墓制のように、民俗学全体として重点をおいてきた調査研究テーマが存在することも事実である。民俗学の場合、とくに資料の蓄積という点で、研究の多様性の確保と重点研究の進展とは二律背反した関係にある。

民俗学は民俗事象に地域差があることを前提としており、⁽²⁾ひとつの研究テーマへの関心がたかまり、複数の研究者が異なる地域の民俗事象を対象に同一テーマに取り組むようになる過程で、地域差を把握するための枠組は、公開され共有されることが必須となる。研究が重点化され参加する研究者が増えれば、その分、調査項目、資料分類方法などのレベルで共通の枠組による規制は厳しくなる。近年は研究者の興味関心が多様化しているため、二律背反するこの問題は顕在化しにくくなっているが、共同研究やシンポジウムなどの際には、依然としてこういった問題の存在を感じることができる。

本稿では、分布図が多数作成された墓制研究において地域差がどのように把握され、表現されてきたかを学史的に整理する作業を行う。具体的には、民俗学史を四つの時期に分け、墓制の分類案とそれらの分類枠組を用いて作成された分布図に注目し、学史を整理していく。この作業を行うことによって、研究の多様性と枠組の共有との新しい可能性を見出したい。

学史を四つの時期に分ける基準だが、まず、1930年代前半の柳田国男を中心とした研究組織の基盤整備をひとつの画期として、それ以前を民俗学確立期以前とし、1930前半～1947年を民俗学確立期とする。つぎに、研究組織の基盤整備の達成点として民俗学研究所設立を捉え、同研究所が活動した1947～1957年を民俗学研究所期とし、それ以降を民俗学研究所期以降とする。1957年以降の約40年間を一括して同じ時期にすることについては異論もあると思うが、これは民俗学全体にとって画期となる出来事が見いだせなかったためである。

両墓制に関する研究は、他分野に比して資料集、研究集成をまとめる動きが活発である。⁽³⁾両墓制の分布に関しても、新谷尚紀によって既にまとめられている[新谷 1993]。本論に入る前に、本稿がこれらの先行する業績に負うところが大きいこと明記しなければならない。

図1 墓地の特相の分布
[辻井 1979 (1930) : 192]

図2 伊賀盆地に於ける墓地の特相
[辻井 1979 (1930) : 193]

※図1, 図2とも『葬送墓制研究集成』[最上孝敬編 1979]第4巻所収の図を引用した。

①……………民俗学確立期以前の分類と分布図

(1) 辻井浩太郎「伊賀盆地における墓地の地理的考察」[1930]の分布図

この論文は、墓制の地域差を対象とし、分布図を描いている点で先駆的な研究である。

辻井は伊賀盆地という一地域を設定して、資料を収集し分析をおこなっている(図1)。分類指標は、墓制のもつ祭祀的な側面に重きをおいたものではなく、土地利用のあり方との関係を重視したもので、資料収集方法は、論文中の記述から、おそらく現地調査とアンケート調査を併用した手法を用いたものと推測されるが、⁽⁴⁾複数の研究者による組織的な収集はおこなっていないものと思われる。

辻井のこの研究に特徴的なのは、民俗学における墓制研究では、ながく採用されなかった分類指標を用いて分布図を作成している点である。近代以降の墓制の再編成を意識した分布図(図2)、ムラレベルの分布図は、確立期～民俗学研究所期の全国分布を重きをおく調査研究とは一線を画している。

(2) 柳田国男「葬制の沿革について」[1929]における指標の提示

その後の墓制研究に直接つながっていく研究として、1929(昭和4)年に『人類学雑誌』に発表

された柳田国男の「葬制の沿革について」がある[柳田 1990 (1929)]。

柳田はこの論文において、墓制に関して「葬地」と「祭地」という二つの概念を設定し、日本の葬墓制史を分析している。二つの概念の主たる根拠として示されているのは、柳田の故郷の墓地に関する記憶であり、日本各地の葬墓制、とくに南西諸島の葬墓制に、「葬地」と「祭地」の多様な関係を見だし、日本人の死に関する考え方が、時代を経るに従って変化してきたことを指摘している。ここでは、島嶼部などには古風が残っているという古典的な理解にそって各地の事例を分析しており、その後あらわれる周囲論的な理解などの分布への視角は明瞭には示されていない。地域差への言及は多数あるが、資料的な制約もあることから、地域差それ自体を研究の対象とする視角はまだないといえることができる。

この時期の墓制研究の特徴としてあげられるのは、組織的な資料収集は行わず、研究者個人の収集資料に基づいて論が展開されている点である。柳田論文には、その後の組織的な資料収集の必要性と展望がかなり述べられているが、辻井論文にはほとんどそういった方向性は見られない。逆に辻井論文の特徴としてあげられるのは、個人レベルで独自の分類指標を設定し、資料収集をおこなったのち、分析を行っている点である。

②……………民俗学確立期の分類と分布図

1930年代に入ると、民俗学の組織面が急速に整備されていく。まず中心的研究組織として、1934(昭和9)年1月に木曜会が発足し、同年5月からは山村調査が開始されている。また、全国規模の研究組織の整備としては、1935(昭和10)年7~8月から1939(昭和14)年に毎年開催された日本民俗学講習会や、1935年9月の雑誌『民間伝承』創刊などが行われている。これらの動きによって、それまで不可能だった大規模な資料収集が、全国規模の組織を基盤として行えるようになった。墓制の調査研究に見られる調査項目の整備や語彙集の刊行は、調査研究組織の大規模化にともなう枠組の共有の必要性にせまられたものと位置づけることができる。

(1) 語彙集形式の資料集の刊行

葬墓制に関する既刊文献からの資料収集は、1933(昭和8)年7月の『旅と伝説』の特集号「誕生と葬礼特輯号」6巻7号で大量の資料が公刊されたこともあって、まず1934(昭和9)年の「葬制沿革資料」[柳田 1990 (1934 b)]がまとめられ、続いて1937(昭和12)年の『葬送習俗語彙』[柳田 1975 (1937)]がまとめられている。

このふたつの資料集の特徴は、どちらも資料の出典を明記している二次的な資料集である点、「喪の始め」「葬式の葬名」など、研究者側が分類枠組を設定し、それに該当する語彙を列挙する形式をとる点である。本稿ではこういった形式を「語彙集形式」と呼ぶ。この形式の資料の公刊は、民俗学研究所期の『総合日本民俗語彙』へつながっていく。

表1 柳田 1935「民俗資料の分類における墓制の位置づけ」(『郷土生活の研究法』より)

①有形文化	住居, 衣服, 食物, 資料取得方法, 交通, 労働, 村, 連合, 家・親族, 婚姻, 誕生, 厄, 葬式, 年中行事, 神祭, 占法・呪法, 舞踊, 競技, 童戯と玩具
②言語芸術	新語作成, 新文句, 諺, 謎, 唱えごと, 童言葉, 歌謡, 語り物と昔話伝説
③心意現象	知識, 生活技術, 生活目的
<p>一三 葬式 (『郷土生活の研究法』から〈 〉内は段落の内容を示す)</p> <p>〈シラセ〉……</p> <p>〈墓〉中でも今私たちの, 特に力を入れて調べているのは, 墓場の組織である。</p> <p>…中略…我々の知りたいのは, 田舎の墓制の変遷である。以前は田舎には墓場が二つあった。すなわち石塔を立てて祀る場所とサンマイ (三味) すなわち埋葬の場所とは別であったのである。今日のごとく三味の上に石塔を立てるようになったのは, 近代の新しい変化であった。……</p> <p>〈喪屋〉……</p> <p>〈枕飯〉……</p> <p>〈巳正月〉……</p>	

(2) 三部分類案の提示

この時期には, 語彙集形式の資料集に見られる二次的・遡及的な資料収集のあり方が拡充すると同時に, 整備された研究組織の基盤を利用した, より積極的な収集を行う動きが具体化し始める。⁽⁵⁾ 確立期の民俗学理論書である『民間伝承論』[柳田 1990 (1934 a)]『郷土生活の研究法』[柳田 1990 (1935)]では, 「採集」と「分類」というキーワードを用いて, 民俗研究者による積極的な収集活動の有効性が示されている。

柳田がこの時期に提唱した民俗の分類方法が三部分類であり, もっとも体系的な分類案は『郷土生活の研究法』に示されている。墓制は, 表1のように位置づけられ, 石塔を建てる場所と埋葬地とが別である墓制が日本の墓制の原型とされている。この時点では, のちに両墓制と命名されることとなる墓制とそれ以外の墓制とを区別する枠組は成立しているが, 分布に関する問題意識はあまりない。⁽⁶⁾

(3) 大間知篤三による資料報告

民俗学史上初めての全国規模の一斉調査として, 山村調査・海村調査がおこなわれたのもこの時期である。これらの調査は, 郷土生活研究所が, 学術振興会の補助を得て行った大規模な調査事業であった。山村調査は, 1934 (昭和9) 年5月から1937 (昭和12) 年4月までの間全国52箇所を対象に, 海村調査は, 1937年5月から1939 (昭和14) 年4月までの間全国30箇所を対象に, それぞれ行われた。

これらの調査の墓制に関する調査成果は, 大間知篤三によって, 1936 (昭和11) 年に「両墓制の資料」という資料報告にまとめられている。この資料報告は『山村生活調査 第二回報告書』に所収されたもので[大間知 1984 (1936)], 刊行物レベルで「両墓制」という用語が用いられた最初のものである。報告書の書式は, 調査地点別に報告を列挙するシンプルなもの⁽⁷⁾で, 山村調査で得られた資料を含め, 全国13カ所に両墓制が存在していることがまとめられている。

両墓制に分類される墓制の資料が, ある程度蓄積された次の段階として, 分布に対する関心が高まっていく。両墓制が近畿地方に濃密に分布していることは, 1937 (昭和12) 年秋の民俗学講座

において大間知篤三によって指摘されている[大間知 1978 (1937):187]。この指摘の背景には、雑誌『民間伝承』や地域ごとの民俗学雑誌上で両墓制への関心が高まり、資料報告が増加したことがある。1944 (昭和 19) 年、大間知は、「両墓制の資料」に新資料を追加した「増補 両墓制の資料」[大間知 1975 (1944)]を発表しているが、ここでは全国から集められた 30 カ所の事例が報告されており、8 年間の間に資料数が倍増していることがわかる。

民俗学全体を見た場合、この時期は、調査研究組織が整備されていくと同時に、民俗学全体として重点をおく研究テーマの発見と、そのテーマに対する事例報告の増加を指摘できる。研究組織が整備されたことによって、「現在把握されている事例を説明する仮説の提示→仮説に基づく分類案の提示→分類案に基づく資料の収集→仮説の検証→新しい仮説の提示→…」という一連の循環が可能となった。

墓制研究に限定すると、両墓制が重点的な研究テーマとして位置づけられられたのがこの時期である。その後、両墓制に関する資料報告は順調に増加していくが、分布への関心という点では、大間知の近畿に濃密に分布するという予測はあるにせよ、分布図を作成するまでには至っていない。

③……………民俗学研究所期の分類と分布図

確立期以後、第二次世界大戦末期の研究事情、出版事情の悪化などの混乱期を経て、民俗学は、それまでの木曜会と雑誌『民間伝承』を軸にすえた研究基盤をより強固なものとするため、1947 (昭和 22) 年に民俗学研究所を設立する。この研究所は、専門研究者の育成から民俗学の普及活動にいたるまで、幅広い役割を負った機関として構想されていた。

民俗学研究所期には、葬墓制研究の分野においても、調査研究の成果がつぎつぎに公刊され、研究が大きく展開している。本来ならそれらすべてをあげて検討すべきであるが、紙数の都合もあるため、本稿では、この時期に作成された両墓制に関する分布図と、『総合日本民俗語彙』(全 5 巻)[民俗学研究所編 1955-1956]に収められた葬墓制関係の語彙の蓄積に注目したい。

(1) 『総合日本民俗語彙』—語彙集形式資料集にみる葬墓制関連資料の蓄積過程

刊行年では前後するが、まず、分布図作成に先行する語彙集形式の資料の公刊事業として『総合日本民俗語彙』(以下『総合語彙』)について述べる。『総合語彙』は、従来の語彙集形式の資料のまとめ方を踏襲し、より大規模化、精緻化した資料集である。確立期に公刊された葬墓制関係の二つの語彙集と、『総合語彙』の葬墓制関係の語彙を、語彙数の蓄積状況で比較すると、「葬制沿革資料」[1934]の段階では 103 件、「葬送習俗語彙」[1937]の段階で 809 件、「総合語彙」[1956]の部門別索引／葬送の段階では 1530 件と、倍増に次ぐ倍増というかたちで資料が蓄積されていることがわかる。

しかし、語彙集形式による資料の公刊は、『総合語彙』以降おこなわれなくなっている。その原因は、資料の管理～公刊という点から見れば、対象となる資料の規模が急激に大規模化しているにもかかわらず、従来の枠組のままで対応しようとした結果、限界を迎えたとすることができる。とくに問題なのが、民俗学研究所の財政、人員規模では『総合語彙』規模の資料集を頻繁に増補・改

図3 民俗学研究所『民俗学辞典』巻頭「両墓制の分布」[民俗学研究所 1951]

訂していくことが難しかったにもかかわらず、編集企画を進めていく段階においてこの問題に対応しなかった点である。資料集の公刊などに際して、資料管理を調査・研究組織にとっての適正規模で運営していくという問題意識の希薄さは、その後の民俗学にも受け継がれていく。

(2) 『民俗学辞典』の分布図 [1951]

墓制に関する分布図として、最初のもは、1951（昭和26）年に刊行された『民俗学辞典』の巻頭におかれた「両墓制の分布」という分布図である（図3）。図上に分布が示されている地点は、70地点であり、さきにみた大間知の時点[1944]で、30地点であったのに対し、地点数で倍以上の数になっている。

タイトル下の注記から判断すれば、この図にプロットされているのは、昭和25年までに『民俗学辞典』編集部が把握している地点である。ここでいう編集部とは、実質的には民俗学研究所の主要スタッフであることから、1950年の段階で研究所が把握している両墓制のほとんどが、ここに網羅されていると考えてよいものと思われる。

この分布図の特徴は、すべての地点に番号が付され、北海道・沖縄を除く日本全国をおさめた図であるにも関わらず、調査地点が特定できる点にある。「両墓制の分布」という表題がついているが、実質的には、先に触れた大間知の資料報告に、あらたな調査成果を加え、地図上で表現した調査報告地点の索引地図として性格が強い。

図4 最上孝敬『詣り墓』巻頭「両墓制の分布」[最上 1956]

(3) 最上孝敬『詣り墓』における分類と分布図

最上孝敬の『詣り墓—両墓制の探究—』は民俗学研究所によって、民俗選書の一冊として古今書院から刊行された著作で[最上 1956]、同研究所の研究員としての最上の研究成果がまとめられたものとして位置づけられる。

最上は、『詣り墓』において、両墓制をさらに細かく分類し論をすすめている。同書におさめられた、「詣り方からみた両墓制」と「両墓制の由来」の2つの論考において、最上は詣り墓と埋め墓それぞれの詣り方の違いから、A～D型の四つ（派生型を入れると六つ）の分類を用いて、資料を分析している[最上 1980[1956]：9-25]。

しかし、この分類は資料編にあたる「両墓制の分布（本文）」[最上 1980[1956]：101-182]には採用されていない。ここでは、両墓制に関する調査資料に、都府県単別にそれぞれ番号をふって整理しており、この形式は大間知が「両墓制の資料」で採った調査地点報告の形式を改良したものといえよう。⁽⁸⁾

『詣り墓』の巻頭には「両墓制の分布」と題された分布図が付されており、約180件の報告地点が示されている（図4）。地図上のそれぞれの点には、本文中の一節である「両墓制の分布（本文）」に都府県別に番号を付けられた報告と対応する番号が注記されており、分布図から本文を参照することが簡単にできるように工夫されている。

『詣り墓』における資料の公刊のあり方全体を俯瞰したとき、特徴として挙げられるのは、資料編的な「両墓制の分布（本文）」を軸にすえて、両墓制に関する考察を展開している点である。民

俗学研究所に蓄積された資料と、自らの調査で得た新資料とを、「詣り方からみた両墓制」、「両墓制の由来」における考察で用いた分類枠組とは異なる枠組を用いて示しているため、資料のどこに注目して考察をすすめているのかを明瞭に理解することができる。こういった『詣り墓』における資料と考察とのバランスは、その後、両墓制に関する調査がすすみ、資料数が増加していく過程で徐々に失われていく。

この時期の墓制研究は、それまでの資料の蓄積に基づいて両墓制に関する分布図が作成されたことによって、一つの画期を迎えている。もっともこの時期の分布図は、「分布」と題しているにもかかわらず、調査報告地点図としての性格が色濃く、図を分析することによって分布の傾向がつかめるとい性格はもっていない。資料集の索引を図上で表現した「索引地図」といった方がよいものである。語彙集形式の資料集が規模の巨大化の限界を迎え、『総合語彙』をもって途絶したのに対し、索引地図形式の資料集は、研究所期以降、文化庁主導の民俗地図などに受け継がれていく。

④……………民俗学研究所期以降の分類と分布図

1957（昭和 32）年民俗学研究所が閉鎖されたことは、それまでの民俗学の研究基盤を大きく揺るがすことになった。とくに同研究所は、資料収集～公刊の中心的役割を果たしていたため、民俗学は資料管理面で停滞に陥った。墓制の分布研究では、両墓制が濃密に分布する地域の研究が進展していく一方で、全国規模の分布に関する研究は徐々に停滞していき、とくに両墓制が希薄な地域の研究は混迷期に入っていく。

(1) 最上孝敬「死後の祭および墓制」における分類と分布図 [1959]

研究所期以降の両墓制の分布図として、まず作成されたのは最上孝敬の「両墓制分布図」である。これは、1959年に刊行された『日本民俗大系 第4巻』に所収された、最上孝敬の「死後の祭および墓制」という論文に付された分布図である[最上 1959: 362-367]。

この図の特徴は、両墓制の分布図としては初めて、複数の記号をもちいて分類を示している点であろう。約 230 地点の報告地点を、本文中に示されたⅠ～Ⅳ型の分類と分類できない地点を五つの記号で現し、北海道・沖縄をのぞく日本全国の分布状況を示している。前述の『詣り墓』の分布図では、両墓制に関する報告の有無だけが分布図上にあらわされ、下位分類については考察で述べる形式をとっていたが、この図では、一步踏み込んで、図上で両墓制の下位分類が示されている。

一方、索引地図として特徴は、『詣り墓』で到達した、調査報告の出典段階まで遡れる形式は後退し、都府県別の番号によって調査地点が特定できることにとどまっている。大系の一部という性格上やむをえないとはいえ、民俗学研究所が閉鎖されたことによって影響を受けた資料整理～公刊機能の混乱の端緒を見出すことができる。

(2) 竹田暎洲「京都府に於ける両墓制の分布」 [1973]

「京都府における両墓制の分布（昭和 25 年）」（図 5）は、『日本の民俗 京都』に所収された分

図5 竹田聰洲「京都府における両墓制の分布（昭和25年）」
『日本の民俗 京都』[竹田 1973:212-213]

布図である[竹田 1973:212-213]。この図は、主として二つの調査事業によって得られた資料を地図上に示したものである。一つは、1950（昭和25）年～1951（昭和26）年に、当時竹田の在学していた京都大学文学部国史研究室がおこなった質問票調査の成果のうちの京都府の分であり、調査成果の一覧は「近畿村落における同族祭・両墓制・屋敷神の分布資料」として公刊されている[竹田 1995（1963, 1964）]。同図は、この資料を基本としつつ、もうひとつの調査事業である磯貝勇の調査資料[磯貝 1955]⁽⁹⁾を取り入れて作成されている。

この図の特徴は、竹田の調査資料が、調査票を各町村の首長宛に出す手法を用いた調査であったこともあって、行政単位ごとに両墓制の有無を確認している点である。さらに、両墓制が確認できないという回答があった自治体、回答自体がなかった自治体については、「報告がない」という空白記号が示されている点が、それまでの両墓制分布図と大きくことなっている。

また、この分布図は従来の両墓制分布図の特徴であった、索引地図としての性格もあわせもっている。自治体名を索引として用いることによって、「近畿村落における同族祭・両墓制・屋敷神の分布資料」の索引として利用すること可能である。しかし、複数の調査によってえられた資料が、同一の図上に配置されていることなどによって、図と元資料の内容とが一致しないところも生じて

図6 最上孝敬「全国両墓制分布図／近畿とその周辺の両墓制分布図」『詣り墓（増補版）』巻頭 [最上 1980]

いる。

こういった細かい問題点はあるが、この分布図は、それまでの研究によって両墓制が濃密に分布していることが明らかになった地域を対象とし、分布研究を精緻化した分布図と位置づけられる。

(3) 最上孝敬『詣り墓（増補版）』[1980]

1956年に刊行された『詣り墓』は、1980年に増補改訂されて再版されている。これは旧版に、その後の最上の論考を2編補ったものであるが、巻頭の分布図が大幅に改定されている（図6）。

この図は、一見するとドットを用いた定量的な分布図に見えるが、実際は、資料数が増加しすぎて旧版には注記されていた都府県毎の番号表記ができなくなったためであって、性格としては調査報告地点図の域をでていない。また、近畿を中心とした両墓制の濃密に存在する地域は、別は大縮尺の地図を用意して分布を表している。

この図は、索引地図の索引機能が失われたものとして位置づけられ、研究所期以降の資料の増加

を従来の手法で処理しようとし、うまくいかなかった例といえよう。

(4) 文化庁主導の分布図作成事業—民俗地図・都道府県民俗文化財分布図

文化庁による一連の日本民俗地図、および文化庁の指導のもとにおこなわれた各都道府県の民俗地図・民俗分布図の調査～公刊事業は、おそらく民俗学史上最大のものであるが、行政調査と学術調査との関係について問題を内包している⁽¹⁰⁾。

墓制研究では、とくに、都道府県単位の両墓制分布図が、これらの調査で大きく進展している。ある程度両墓制の分布が見られる地域でも、分布図がこのときに初めて作成されたところが多い。一方で、統一的な調査項目で調査をおこなっているため、両墓制の希薄な地域の墓制に関する分布図のように、あまり意味を見いだせない分布図もかなりの量に上っている。

民俗学の分布図に特徴的な索引地図としての性格は、『日本民俗地図』については、解説書および各都道府県が出している調査報告書の索引として利用できるが、都道府県別民俗分布図は、もともになる資料集が公刊されていないため、参照先のない索引地図といった状況になってしまっている。

(5) 個人研究における分布図の作成

文化財行政と連携した大規模調査が行われた一方、研究者個人の問題意識に拠って、独自の分類枠組を構築し、資料を収集～分析した研究も数多く行われている。とくに両墓制が濃密に存在している地帯において、分布に関する研究が活発である。ここではそのすべてを取り上げることはできないが、独自の分布図を作成したものとして、若狭、淡路島地方を対象とした佐藤米司の一連の研究[佐藤 1977]、但馬地方を対象とした日野西真定の研究[日野西 1968]、伯耆地方を対象とした坂田友宏の研究[坂田 1982]などがあげられる。

一地域の両墓制の分布の問題に積極的に取り組んだ研究としては、淡路島の両墓制を対象とした八木康幸の一連の研究があげられる[八木 1998 (1975, 1977, 1979, 1989)]。八木は従来の民俗学の索引地図的なあいまいな分布図ではなく、調査地域の設定や資料の提示方法を明示的に示した地理学的な分布図の手法を導入している。とくに複数の縮尺を用いている点、複数の分類枠組を用いた分布図を作成している点で、両墓制の分布研究を大きく進展させている(図7)。

研究所期以降の墓制(実質的には両墓制分布)分布の研究は、大きく分けて、文化財行政との連携による大規模な分布調査と、両墓制が濃密に分布している地域における個人レベルでの研究の進展のふたつの方向に分化している。

大規模調査の弊害としては、語彙集形式の資料集が『総合語彙』で破綻した事実と軌を一にする、資料規模の巨大化に対する管理方法の破綻が指摘できる。また、分類枠組に問題意識を反映させることが困難になったため、分布が希薄な地域についても分布図が作成されたことなども弊害であった。

個人レベルの研究は、八木の研究に見られるように精緻化し大きな進展をみせているが、しかし一方で冒頭で述べたような両墓制の希薄な地域の墓制の分布研究は、新しい展開を見せることなく現在に至っている⁽¹¹⁾。

図7 八木康幸「淡路島の墓制分布」「淡路島中部の両墓制」
[八木 1975]

結語——研究枠組の共有と研究の多様性の確保

以上、約70年にわたる民俗学史を四つの時代に切り分け、非常に概略的ではあるが墓制研究の分類と分布についての調査研究の動きの整理を試みた。

研究基盤が整備される以前は、辻井の研究のように個人ごとの優れた研究はあっても、全国規模の分布をみるような大規模な研究は不可能であった。つぎにくる確立期～民俗学研究所期の柳田～大間知・最上らの研究段階では、「現在把握されている事例を説明する仮説の提示→仮説に基づく分類案の提示→分類案に基づく資料の収集・分布図の作成→仮説の検証→新しい仮説の提示→…」というサイクルが完成する。しかし、このサイクルが2巡目以降に入った民俗学研究所期以降、研究が展開・深化していく一方で、増加する資料の管理面で破綻が生じる。結果として、分布が濃密な地域では、初期の辻井の論文と同様の個人で管理しうる資料をもちいた詳細な研究がおこなわれ、一方で、希薄な地域では分類枠組の硬直化によって、新たな問題を提起するための仮説の提示すら難しい状況に陥っている。

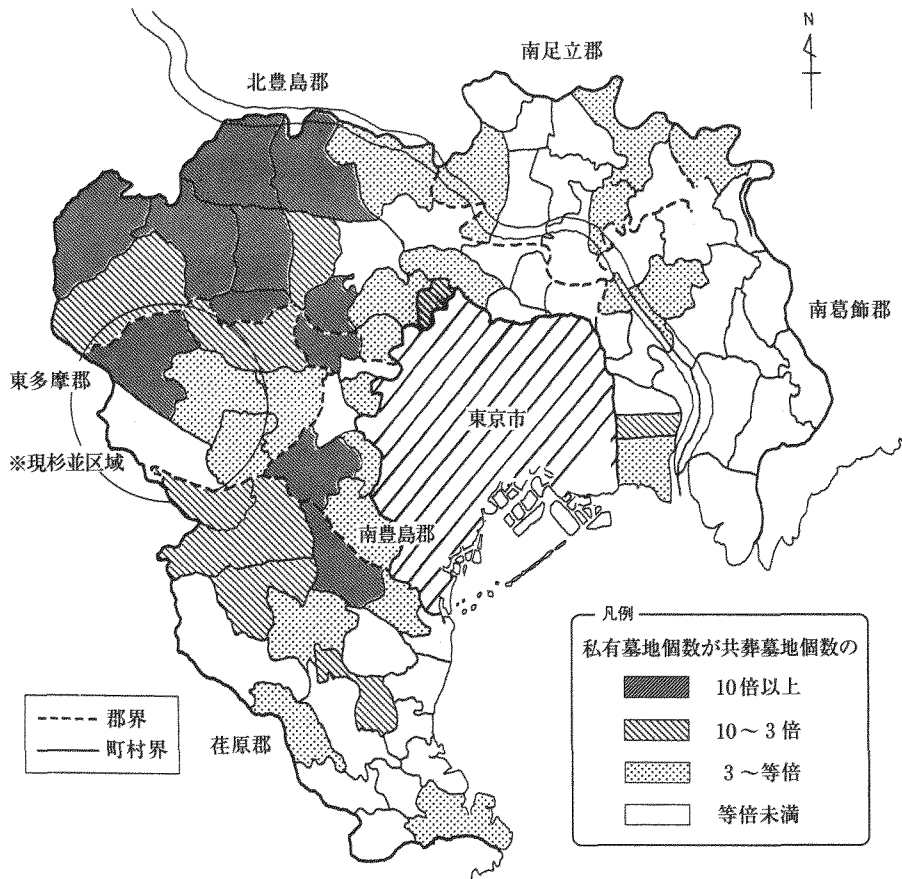


図8 岩野邦康「共葬／私有墓地の比率（東京府下六郡・明治22年）」
『杉並の墓地』[岩野 1999:18]

※町村界が変化しているため、隣接する町村のデータが混入している地区が若干ある。

これらは、従来指摘されているような中央集権的な研究体制の問題であると同時に、資料管理手法の柔軟性の問題でもある。

筆者は、冒頭で述べたように東京、埼玉の屋敷墓／共同墓地の分布に興味をもち、明治期の行政資料によって、明治20年代の東京府下六郡（現在の東京23区外縁部）の墓制について分布図を描くことを試みた（図8）[岩野 1999:18]⁽¹²⁾。この地域では、東部地域に比して、とくに北西部地域に屋敷墓的な特徴を持つ墓地（資料上では私有墓地）が多い傾向があることをみることが出来る。現段階では分布を説明するための仮説すら立てられないが、両墓制以外の墓制の分布図を作成することによって、新しい問題を提起できることの一例とすることはできよう。

柳田の用いた方法に対する批判があらわれて以降、民俗学では、地域を限定し記述を重視した調査研究が主流となり、多様な成果を得ている。重点的なテーマを設定し、複数の研究者が調査研究枠組を共有して行う研究方法は、確立期～研究所期に比べて行われなくなってきている。しかし、筆者が東京近郊の墓制を対象に試みているように、従来の分類体系からはなれた新しい指標にもとづいた分類枠組を設定し、分布図を作成してみればじめて分かる民俗の地域差の問題も、いまだ数多く存在していると思われる。分類・分布を重視するアプローチは、確立期～民俗学研究所期のよ

うに民俗学の統一的な方法ではなくなっているが、方法自体が全面的に無効とされたわけではない。

70年にわたる墓制研究への取り組みを概観してみると、『総合語彙』や「都道府県別民俗分布図」のような大規模な事業は、調査研究方法の限界とは別な次元の、資料の獲得～公開に関する資料管理の限界によって挫折しているということがみえてくる。研究枠組の共有と研究の多様性の確保のバランスをとること、ことばをかえれば、フレキシブルな民俗の分類・分布研究の方法論、技術論、そしてその基盤となる資料論の構築が、現在の民俗学にもとめられている。

付記

本稿は1998年11月にポスターセッションにおいて「死の分類・死の分布—民俗学は死をどのように対象としてきたか—」と題して発表した研究成果にもとづく。発表では視覚的なわかりやすさを優先するポスターという形式にまとめたこと、短時間の口頭発表であったことなどもあって、本稿の執筆に際して、内容のバランスを調整し、また発表以降に進展した研究の成果も盛り込んだ。とくにポスターセッションの時点では中間報告の段階だった、東京都杉並区域の明治20年代の墓地に関する研究は「杉並の墓地」[岩野1999]としてまとめているので詳細はそちらを参照されたい。

注

(1)——東京都杉並区と埼玉県富士見市鶴新田地区。調査の成果はそれぞれ「杉並の墓地—明治期以降の墓地分布の変遷と管理形態の諸相」[岩野1999]、富士見市考古館の調査報告書「鶴新田の両墓制」[富士見市考古館編1998]にまとめられている。後者は両墓制をもつ地区の調査であるが、周辺地域には屋敷墓、共同墓地が混在する分布がみられる。

(2)——国立歴史民俗博物館の共同研究「民俗の地域差と地域性」では、民俗事象に関する地域性という概念が曖昧に用いられているのに比して、地域差という概念は明確な概念として用いられているという立場をとる研究者が多い[岩本1993:19, 福田1993:80]。近年では小川直之も同様の立場をとっている[小川1998:193]。

(3)——名著出版の『葬送墓制研究集成』(全5巻)、明玄書房の地方別葬送・墓制シリーズ(全10巻)など。

(4)——「調査の不充分と回答に接しない村が多いため、判然たる分布を示すことが出来ぬが……」という記述などから推測した[辻井1979(1930):191]。

(5)——本稿でとりあげた三部分類の他にも採集調査に関する枠組は、この時期いくつか公表されている。山村海村調査の「採集手帖」に掲載された質問集にも両墓制に関する質問項目が設けられているし、雑誌『民間伝承』1-10[1935]に、橋浦泰雄の文責で掲載された「葬制資料採集要項」にも見いだせる[橋浦1935]。また、『日本民俗学入門』[柳田・関1942]にも両墓制に関する質

問項目が設けられている。

(6)——柳田国男全集第28巻解題によれば、『郷土生活の研究法』が単行本として刊行されたのは、1935(昭和10)年8月であるが、三部分類について細目にわたって述べられている「民俗資料の分類」は、1932(昭和7)年11月～1933年3月にかけて行われた口述を小林正熊がまとめたものである[柳田1990(1935):645]。

(7)——両墓制という用語は、大間知の設定した概念ではなく、「葬制の沿革に就て」『明治大正史世相篇』などの先行する柳田の論考における「葬地」/「祭地」の概念を整理した用語である。また、調査項目が改訂されていく過程で両墓制が項目に反映されていったことは、福田によって指摘されている[福田1984:9-19]。

山村調査の資料をもちいた報告としては、「両墓制の資料」以前にも、昭和10年7月に日本民俗学講座での講義をもとにして、「冠婚葬祭の話」と題した講義録を公刊している[大間知1935]。ここでは、「葬地」/「祭地」という語だけを用いて説明しており、両墓制の語は用いていない。

(8)——『民俗学辞典』巻頭の分布図と最上の分布図とでは、後者の方が後発だが、前者の分布地点をすべて記載しているわけではない。両者の作成過程については今後の検討が必要である。

(9)——作図の経緯については、最上孝敬の文章に依拠した[最上1980:283]。

(10)——『日本民俗地図』にまとめられた資料は、1962(昭和37)～1964年度にわたって行われた民俗資料緊急調査によって得られたものである。この調査は文化財保護委員会(文化庁の前身)主導のもと、国庫から各都道府県の教育委員会に補助金を出して行われた。調査の規模は、各都道府県ごとに約30箇所を対象に20項目の調査をおこなうという非常に大がかりなもので、1342箇所の調査票が集積された。これらの調査成果を地図上に示し、解説書とあわせて刊行されたのが、『日本民俗地図』(1969(昭和44)～1988年)である。

つぎに、都道府県民俗文化財分布図の調査がはじまる。この調査は、1974(昭和49)～1984年にわたって、各都道府県ごとに民俗地図、民俗文化財分布図を作成するために行われたものである。この事業は、民俗学史上、空前絶後の規模で行われた一斉調査で、国庫補助のもと各都道府県毎に約150箇所を対象におこなわれ、全調査が終了した段階で全国7114地区が対象とされ、3250枚の分布図が作成されている[天野 1999:6]。

このように大規模な調査であったにもかかわらず、学史上に位置づける際に問題となる最大の要因は、行政調査としておこなわれたところにある。それまでの大規模な調査は、研究者の問題意識を共有するところから調査～公刊の分類枠組を構築していったものであるのに対し、文化庁主導による調査は、民俗資料～民俗文化財の保護のための基礎資料を作成するところに目的がおかれている。和田正洲は行政調査と学術調査とは根本的に異なるという見方をしている[和田 1975:13-16]。

(11)——これらのほか、近年おこなわれた注目すべき調査研究として、国立歴史民俗博物館「死・葬送・墓制資料集成」[1999]がある。本稿執筆段階では、まだ刊行途中であるが、この調査成果を利用した今後の研究の展開が期待される場所である。

(12)——この図は、行政単位の変化による区画の変化をうまく処理できていないため、やや正確性を欠いている。現在、統計の元となった資料に照合して、より精密な分布図を作成する事を試みている。

参考文献

- 天野 武 1999 『『都道府県内民俗文化財分布調査報告書』復刻の意義』『都道府県別日本の民俗分布図地図集成』東洋書林
- 磯貝 勇 1955 「丹波地方及びその周辺における両墓制について」『綾部高校研究紀要』第2集
- 岩野邦康 1999 「杉並の墓地—明治期以降の墓地分布の変遷と管理形態の諸相」『杉並区立郷土博物館研究紀要』第7号
- 岩本通弥 1993 「地域性論としての文化の需要構造論」『国立歴史民俗館研究報告』第52集
- 大塚民俗学会 1985 「シンポジウム 民俗地図をめぐる」『民俗学評論』13
- 大間知篤三 1935 「冠婚葬祭の話」柳田国男編『日本民俗学研究』岩波書店所収
- 大間知篤三 1936 (1984) 「両墓制の資料」比嘉春潮他編『山村海村民俗の研究』名著出版所収
- 大間知篤三 1937 (1978) 「墓制覚書」『大間知篤三著作集 第4巻』未来社 ※初出「ひだびと」5巻11, 12号
- 大間知篤三 1944 (1975) 「増補 両墓制の資料」『大間知篤三著作集 第1巻』未来社 ※初出大間知篤三「家と民間伝承」満州修文館
- 小川直之 1998 「地域差と地域性—その可能性の検討」宮田登編『民俗の思想』朝倉書店
- 国立歴史民俗博物館 1999 『死・葬送・墓制資料集成』国立歴史民俗博物館
- 佐藤米司 1977 『葬送儀礼の民俗』岩崎美術社
- 坂田友宏 1982 「東伯耆の両墓制」『山陰民俗』39
- 新谷尚紀 1993 「両墓制の分布についての覚書」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集
- 竹田聰洲 1973 『日本の民俗 京都』第一法規
- 竹田聰洲 1995 (1963, 1964) 「近畿村落における同族祭・両墓制・屋敷神の分布資料」『村落の構造と寺院』竹田聰洲著作集 第9巻 ※初出「文化学年報」12, 13
- 辻井浩太郎 1979 (1930) 「伊賀盆地における地理的考察」『地球』14-6 『葬送墓制研究集成』第4巻所収
- 橋浦泰雄 1935 「葬制資料採集要項」『民間伝承』1-10
- 日野西真定 1968 「兵庫東城崎郡竹野町附近の両墓制及び葬制の研究」『近畿民俗』45
- 福田アジオ 1984 「解説—「山村調査」と「海村調査」」比嘉春潮他編『山村海村民俗の研究』名著出版
- 福田アジオ 1993 「伝承地域と民俗の地域差」『国立歴史民俗館研究報告』第52集
- 富士見市考古館編 1998 『鶴新田の両墓制—富士見市下南畑・鶴新田墓地に関する民俗調査概要報告書』富士見市考古館

-
- 民俗学研究所編 1951 『民俗学辞典』東京堂出版
民俗学研究所編 1955-1996 『総合日本民俗語彙』全5巻 平凡社
最上孝敬 1956 『詣り墓』古今書院
最上孝敬 1959 「死後の祭りおよび墓制」『日本民俗学体系』第4巻
最上孝敬編 1979 『葬送墓制研究集成 第4巻 墓の習俗』名著出版
最上孝敬 1980 『詣り墓(増補版)』名著出版
八木康幸 1998(1975) 「淡路島中部の墓制」八木康幸『民俗村落の空間構造』岩田書院 ※初出『地域文化』11
八木康幸 1998(1977) 「村落と墓制—淡路島灘地区の事例」八木康幸『民俗村落の空間構造』岩田書院 ※初出
蛭沼寿雄編『本位田重美先生定年記念論文集 地域と文化』
八木康幸 1998(1989) 「村落墓地の規模について—淡路島を例として」八木康幸『民俗村落の空間構造』岩田書
院 ※初出浮田典良編『日本農産漁村とその変容—歴史地理学的・社会地理学的考察—』大明堂
柳田国男・関敬吾 1942 『日本民俗学入門』改造社
柳田国男 1990(1929) 「葬制の沿革について」『柳田国男全集 12』筑摩書房
柳田国男 1990(1935) 「郷土生活の研究法」『柳田国男全集 28』筑摩書房
柳田国男 1975(1937) 『葬送習俗語彙』国書刊行会
柳田国男 1990(1934) a 「民間伝承論」『柳田国男全集 28』筑摩書房
柳田国男 1990(1934) b 「葬制沿革資料」『柳田国男全集 12』筑摩書房
和田正洲 1985 「文化庁の『日本民俗地図』」『民俗学評論』13

(新潟市郷土歴史博物館建設室)

(2001年2月28日 審査終了受理)

How Has Folklore Dealt with Death as the Research Subject? Historical Development of Grave Distribution Map

IWANO Kuniyasu

In the research of grave system distribution in the suburbs of Tokyo, it might have more possibilities to use new indices of for example personal estate grave/public cemetery rather than those of dual/single grave. Before suggesting this kind of ideas, we should reconsider the development of researches within the framework of dual/single grave in the history of folklore. In this paper, the author examines the historical development of grave system distribution maps, paying attention to the classification scheme and the drawing of maps in the scheme.

A general survey of folklore history shows that folklorists were most strongly conscious of a common research framework in 1930's during the time of the establishment of folklore. At this time, the folkloric classification framework was opened to the public and held in common in the form of classified folk terms, branch division into three groups, questionnaire, essential points for fieldwork, etc. As for the study of grave system, it layed emphasis on the dual grave system.

Until the end of 1950's when Research Institute of Folklore was closed, studies within the framework of dual/single grave had made satisfactory progress, especially it was active to draw distribution maps compared with other research fields. But in 1970's the studies of grave system with the dual grave system for its nucleus entered a inactive period. While detailed studies were done in the areas with dense dual grave system, studies in the areas with sparse dual grave system were reduced to a chaotic state.

To deal with an important folkloristic theme based on an intensive fieldwork within a common framework is in a way conflicts with a free research on an individual theme of a researcher, especially in the point of accumulation and exchange of materials. In the history of Japanese folklore, handling folklore materials tends to lose control when the scale of materials exceeds the limit. The theory of folklore materials should overcome this tendency from now on, and should try to investigate the way to stand together the common research framework and the variety of individual studies.

key words: folklore history, research of grave, ditribution map, theory of folklore materials, form of classified folk terms
